

日時 平成21年6月24日(水)

13時30分～16時30分

場所 高知県教育センター分館

1 開会

2 報告(前回の協議について)

◆事務局

前は子どもたちを取り巻く現状や課題について協議を行った。

家庭においては虐待や養育放棄、経済的、家庭不和等の問題が増えてきている。母親がひとりで子育ての悩みを抱え込み、家庭と仕事の両立でなかなか保護者会活動にも参加できない状況がある。また、PTA保護者会でも親同士がつながりにくく、PTA活動の内容や誰がどのような役割をしているのかさえも知らない親も増えてきていることが出された。

学校においては、子どもたちの厳しい現実や生活背景を知らない教師がいる。生活保護や支援の手だてについても教師自身がよく分かっていないのではないかという課題も出された。地域との調整役や管理職も忙しく、動ききれてない現状がある。また学校によっては開かれた学校づくりを推進してきたが、外から人が入ってくることにまだ抵抗がある。

社会全体が人づくり・子育てについての考えが希薄化してきている現状と課題を踏まえて、具体的な取組が出された。

PTA活動については、組織の在り方が家庭・親への支援に大きく影響するため、PTA活動をコーディネートする人を育てていく必要がある。保護者が参加したくなるようなイベントを企画し、参加意欲を盛り立てること。また、親同士がお互いに相談し合える仲間としてつながっていけるようなPTA活動を仕組んでいってほしいという意見が出された。そして、子どもの生活環境、生活背景にある課題をふまえたかわりができるように、教師がカウンセリングの手法を身に付けていく必要がある。

次に、土佐の教育改革では開かれた学校づくりを進めてきたが、学校間で格差が生じている。うまく進んでいる学校は、地域の人とともに活動する学習を仕組むことや、得意技を持った人のリストを作りいつでも相談できるような体制をつくることもアイデアとして出された。

これらを具体的に進めていくために「家庭・親への支援」とか、子育てについてのモデル地区を設定し、推進するというアイデアも出された。

3 問題提起

◆高知新聞社 塚地和久さん

「高知の教育 いま現場で」というタイトルが付いた連載は、一昨年度末に中学生の学力をテーマにして、自分とあと2人の教育担当記者でシリーズ十数回書いた。そのうち、自分が担当したのは学びに向かうことを邪魔している子どものしんどさである。

記事の中に出てくる子どもは大変な家庭状況である。記事を書く時、本当にこの子は明日ちゃんと学校に行けるのかと気にしながらこの一連の記事を出してきた。この記事の内容には、前回の推進協議会で出された保護者や家庭、地域社会の課題が重なるところがたくさんあると思う。

特に都市部の子どもたちは大変な課題を抱えた家庭環境にある子どもも多く、重いものを背負っている。その子どもたちを学校の授業の中で垣間見ると、本当に親しい友達の影が見えなかった。それでも、

以前に「おれの家、野菜があまっている。お前持って帰らないか」という中学生の会話を聞いたことがある。この2人の関係に温かいものを感じた。そういった温かい雰囲気は都市部の中学・高校の学級の中にはもうちょっとあってもいいんじゃないかなと感じる。

一方、郡部の生徒数減に悩んでいるある高校には温かい雰囲気があった。それは地域の風土もしくは家庭・生育歴等が関係していると考えられる。しかし、郡部の地域社会にはそういった温かきがあると、そうでもないところがある。地域の人口減と仕事が立ち行かなくなっている苦しい経済状況が原因で保護者間の関係に希薄さが生まれ、それに基づくかどうかははっきりとしないが、子ども同士の人間関係も希薄になっている。郡部の子どもはたいへん人懐っこいが、子ども同士の集団は都市部とあまり変わらない。

自分の思いを率直に表現する子どもがいる学級を見ることがあった。その子のお話を聞くことによって授業が進まなくなり、担任は十分に話を聞いてやれなくなる。すると、その子どもは不満をあらわにし、暴れる。他の子どもは黙っている。残念ながら、僕が望む学級の姿ではなかった。

郡部の中学校の教員は、幼い時からの少人数ゆえに起きる人間関係の固定化に心を痛めていた。リーダー役をやったり、強い物言いができる子といつも誰かに従わされている子の関係は立場が逆転することはない。従わされている子どもは我慢している。我慢できずに不登校になった子もいる。そうになると、その子と保護者に対して「学校へ行かない悪い子、親のせいでそうなった」という見方が郡部にはまだまだある。また、部活動のなかでの子ども同士の関係がうまくいかなくなると、学校に行きづらくなってきているケースもあった。

ただ、郡部においては、地域社会の中での人間関係にまだまだあたたかいものがあり、ストレンジャーが行くとたいへん世話がしてくれる。しかし、昔から続いている人間関係の中でいろんなことがあって、実は人間関係がうまくいっていないこともある。

そういった状況の中で、何かに弾き飛ばされたわけでもないが、学校に行きづらくなっている子どもがいる。豊かな自然に囲まれて人情厚そうな地域で、エネルギーを感じる時もあるが、子ども同士のつながり、家族のつながりにおいては何か寂しい感じを受けたりする。

郡部・都市部ともに、子どもたちの中には、人間関係をストレスに感じている子どもは多い。高校生においては5割超の生徒がストレスを感じているというデータがある。

学校においては、総合的な学習の時間などで、人との出会いのなかで様々なことを学ぶ学習をしている。また、開かれた学校づくりによって、いろんな人が学校に入るようになり、地域の人を知り、高齢者の方と出会うことによっていろんな知恵を授かり、地域の中のことをより詳しく知る子どもたちが現れてきた。しかし、それでもなかなか追いつかないぐらい他者とつながる力の衰えを感じている。

高知県は小規模校が大変多い。なおかつ小規模校がある地域にも温度差があり、すごく学校に協力的な地域と、さほどそうでもない地域がある。郡部っていいなあとか、田舎っていいなあ、自然が多くていいなあというものの、一枚はいだ中にあるのは、いろんな体験が狭められているという現実だ。また、都市部においても、郡部においても、いろいろな課題がありそうだが、表面に出てこないというのが、今、高知県の子どもたちが抱えられている課題ではないかとも思う。

4 協 議

- 教育センターでの保育士や教員の研修の中で、「保護者と地域を巻き込んで、しんどい状況の子どもを救うのは学校現場しかないんだ」と話をするが、悩んでいる先生の解決につながっているのか

という悩みがある。本当にしんどい状況の子どもを救うための実につながるものはないだろうか。

- 中学校校区のなかに、家庭や子どもに関わることのできる、視線の温かい、ハートの温かい人材を置けないだろうか。
- 学校と家庭で話ができにくい場合、子どものことを見てもらえる第3者のケースワーカーのような人が、学校に入って行くことで先生たちも動きやすくなるという意見は前回もでていた。
- 以前勤務していた小学校の中学校区には 72 名の児童民生委員さんがいた。担当校区の小学校には週 1 回立ち寄ってくれ、学校図書館の担当もしてくれる日もあり、その中で子どもたちの様子も見せてくれている。個別的対応の必要な子どもたちには、スクールソーシャルワーカーが週に 1 回必ず入ってくれる。特別支援コーディネーター、民生委員さんとのケース会も開き、不登校・発達障害の子どもにできるだけきめ細かな対応をとってきた。

学校の課題を保護者に訴えても、自分の子どもの課題としてとらえてもらえないというケースが多々あった。保護者にもっとかかわる取組をする必要がある。

- スクールカウンセラーとして学校に行った時、先生のチームワークはどうなんだろうか？と感じることがある。先生のチームワークがよく温かい学校は、教育環境がよく子どもも落ち着いている。
- 先生同士が互いに尊重し合い、温かい雰囲気のある学校は、子どもたちがいろんな課題を背負っていてもいい感じがする。課題の多い学校でも学年団のチームワークがよく管理職もその中に入って活動している学校は、いろんな面でのよい取組がある。
- 子ども同士の間関係が保育園から中学校まで固定化され、保護者の経済・地位もそれに影響しているという小規模校の実態がある。それが子どもたちのパニック・緘黙として表れるということが保小中連携の中で話題になる。それを解決するためには、人権教育の中で大事にしてきた仲間づくりが必要である。また、家庭における会話の減少が原因で、子どもたちが感情を表現することが難しくなっている。親育ての大切さが言われるが、保育現場では親育てまで手が回らない。厳しい家庭環境の子ども、また経済的には豊かでも本当にいろんなしんどさを背負った子どもを集団の中でどうするかと考えた時、感情を言葉で表現するということが必要であると考え、取り組もうとしている。
- 地域のコーディネーターまではいかなくても、多角的な考えを持った保護者のつながりをつくっていくことも大切である。
- 他者とのつながりの希薄さが塚地さんの話の中にも出ていたが、教育支援センターに来所している子どもたちのなかには何らかの発達障害がある子どもが非常に多い。そういった子どもの家庭は、子どものことをしっかりと理解し、包み込むような気持ちが必要だと思うが自分の都合に合わせた保護者が多いことが気になる。親子のつながりを大切にしたい。
- 私は先生方に「生徒が見えますか」と尋ねたい。ある中学校で先生がテストを返す時、普段 90 点とか 100 点をとっている A 君が 80 点だった。その時「あんた、もっと頑張らないかんじゃないかね」と声をかけた。20 点とか 30 点取っている B 君が 50 点か 60 点だったが、黙ってテストを返した。その子は先生に一言声をかけてもらいたくて、「先生、僕のテスト見てや、何か言うことない？」と先生に言った。先生は、「上等上等」と目も合わせず言ったため、生徒は怒り同級生を殴ったことがあった。何でも一言が子どもの心を傷つけることを知ってもらいたい。

2 点目は、「絆」という言葉をキーワードに子ども同士、親子、祖父母、地域の人との絆を育てることに高知県の教育は力を入れてほしい。

3 点目は先生方は情熱や熱意、鋭い感性を常に自己点検し、互いに学び合ってほしい。多忙な先

生方をどういう形で行政がフォローしていくことも課題として考えてほしい。

- 私の学校は、不登校や発達障害、自閉症の子どもたちを預かり、生活の向上をめざしながら進路保障をし、卒業後もフォローしていく学校なので職員の人数も多い。そのため厳しい状況におかれている生徒の家庭にもかかわることができる。学校が良くなるのも悪くなるのも校長の姿勢、学校経営が大きく影響している。人権の視点を持って教職員と対峙しながら引っ張っていかないと学校はよくなると思う。こういう管理職であるべきだという塚地さんの考えを聞きたい。
- 教職員の頑張りを認め、評価できる管理職がいる学校は、先生のモチベーションは下がらない。大規模校ではそれぞれの先生の活動が見えにくく、自分のやったことが認められずモチベーションを落としていった先生も大変多くいた。小規模校にも課題はある。「あの子が頑張れる学校をつくらないかんね」というふうになってほしい。
- 学校へ講演に行った時、校長のコミュニケーション能力や、一人で忙しく働く校長を見て他の教員との連携はどうなっているのだろうと感じる。

ソーシャルワーカーは自分が幸せじゃないとできない。自分がしんどいと他の人に向き合うことができない。子どもを支える学校では先生が疲れている。保護者もそれぞれの課題で疲れている。だから、保護者の支援と教員の支援の必要性を感じる。

スウェーデンでは、障害のある子どもが生まれると家族ががんばろうという姿勢がある。そのような家族の在り方が子どもへの支援にとって大切である。
- 教育の本来の目的は自立と他者との共生である。この頃、他の人と共に生きること、つながりを持つことが難しくなっている。私たちが取り組んできた同和教育・人権教育でも「他の人と共に生きる」ことを大切にし、さまざまな子どもや親、地域の課題について取り組んできたが、残された課題もある。現在、不登校・いじめ等の課題がある中で、文部科学省から「人権教育の指導方法等の在り方について」が出された。この内容をふまえた取組みを進めることが大切である。
- 「高知の教育 いま現場で」に対する県民の声を聞きたい。
- 中学校批判や中学生という時期の大変さについての意見が多かった。中には、「自分は他者から認められていない」「学ぶ意義がわからなくなった」等の意見も寄せられた。
- 私の学校はしんどい状況の子どもが多い。だから、管理職の自分が動かず、先生方に（ああしろ、こうしろと言えない。まず自分が動こう）と考えホームを持っている。自分のクラスは集団に入れない子どもたちのホームで、一人一人のカリキュラムについては、卒業までの期間を柔軟に考えながら時間割を組む。保護者をお願いしているのは3年で卒業ということにこだわらないでほしいということ。高等学校だから、学力もつけないといけないが、本校の子どもたちに卒業までにつけてほしい力というのは、人とかかわる力だと思っている。
- サポートステーションでひきこもり・不登校の支援をしているが、若者のコミュニケーション力のなさを感じる。子どもたちの支援の仕方は、それぞれ個々によって違うが、まずは子どもの心に寄り添っていくことから始まる。一対一で向き合うことによって子どもは心を開く。

保護者一人一人が、自分の子どもをどう育てていくかを踏み込んで考える場が必要である。学級懇談会の活用が考えられるが、地域に関わることのできる人、PTAをコーディネートできる人を作ることは可能だろうか。
- 地域の「世話できるおばちゃんパワー」を活用することも一つの手立てである。それを公的な機関が保障する。市町村に任せると地域で格差が出るので県教委として行ってほしい。
- 子どもや家庭が抱えている課題に対して、県の教育委員会として取り組んでほしいと思っている

ことは他にはないか。

- 2つある。1つ目は、PISAの調査結果においては、経済力がある家庭の子どもたちの学力は落ちていない。反対に経済的に困難な家庭の子どもたちの学力はどんどん落ちてきている。高知では県教委も地教委もあまり関係ないと言っているが、そうではないと思う。安定した暮らし、人権が守られている状況の上に学力あると考える。高知における「経済格差と学力」について調査してもらいたい。

2つ目は教育の場にかかわれる人を探し、活用してもらいたい。

- 今日は塚地さんから話を聞き、質問をする形で話をすすめ、その中で「子どもに対する支援」の具体策が出てきたと思う。それは次のようなものだ。

- ・コーディネーターあるいはケースワーカー的な人が存在し、学校と家庭、あるいは学校と親、学校と地域をつないでいくことが必要である。
- ・人材を見つけ、活用していく方法を県の教育委員会に取り組んでももらいたい。
- ・教員の資質（子どもとの向き合い方・感性）を育てることが必要である。
- ・管理職、特に校長先生の姿勢の在りようが大切であり、前向きな管理職が出てくるためにどういった手立てをとるべきか。
- ・学校のチーム力、課題を共有する仕組みが必要である。
- ・多忙感を持っている教員の心のケア必要である。
- ・就学前からの対策の一つとして、家族を支えるという意味で教育的ケースワーカーな存在の人が必要。

以上のように、子どもへの支援は、家庭、親に対する支援の在り方、学校に対する支援や授業の在り方を考えていくことであり、地域や関係機関にいかに協力を求めていくかがあって初めて成り立っていく。

この後、2回の推進協議会では、前回と今回出てきた意見を整理して、具体的に誰が主体となりどのように取り組んでいくべきか。また、どのように取り組みを組み立てていけばいいかという協議をする。それを県の教育委員会が受け、議論し、素案が出るだろうと考えている。

- 少し補足をしたい。先ほど塚地さんから、家庭の経済力と学力の関係について、教育委員会が認めないという話があったが、実はメッセージの送り方が非常に難しいので、説明したい。

「家庭の経済力が弱い＝学力が低い」ではない。経済力の弱い家庭でも学力の高い子どもはいる。学校単位でも、就学援助率が高いが児童生徒の成績がよい学校もある。しかし、トータルで平均として見れば、経済力が落ちれば学力は低くなることは事実である。その統計データは県教委では把握していないが、これは当たり前の話だと思っている。ただ、県教委や市教委が、そういう言い方をすると、そこで進歩が止まってしまう。だから、私は、教職員に対して「それを言うな。そんなこと当たり前やから言うな」と言う。その中で「頑張って良くすることもできる。まず教職員が頑張らないかんやいか、できる範囲でやらないかんやいか」というメッセージを送っている。